今日は、七月の三日。もうすぐ七夕ですね。一年生の教室の前に、笹竹に短冊をつけた七夕飾りが出現しました。見た人はいますか。さて、この葉っぱ、見えますか？（実物提示）

この葉を見て、名前が分かる人は、さすがにいないでしょう。「梶＝かじ」という植物の葉です。高学年の人なら分かるでしょうか、梶という字は、左側が木、右側が尾っぽの尾と書きます。

今から千年以上も前の平安時代は、この梶の葉に墨で和歌や字を書いて七夕の飾りにしていたようです。

江戸時代の初め頃、七月の六日になると梶の葉を売りに来る人がいて、その梶の葉を買って、墨で和歌や願い事を書いていましたが、江戸時代も終わりの頃になると短冊に字を書くようになったようです。

今でも京都では、七夕の飾りに梶の葉を使うお家もあるようです。えっ、この梶の葉、どこから持ってきたのかですって。

これは私が生まれた家の庭から、君たちに見せようと思って、昨日切りとってきたものです。

京都にある北野天満宮や九州の大宰府にある天満宮のように、「天満宮」と名前の付く神社には、「ある人」が祭られています。さて、その人は誰でしょうか。

正解は、菅原道真（すがわら の みちざね）さん。今では「学問の神様」として有名ですが、その昔、太政大臣・左大臣・右大臣と言って、三番目に偉い右大臣だったのが、この菅原道真さん。とても頭のよい人だったので、妬まれたようです。左大臣の藤原時平という人が告げ口をして、その当時は片田舎だった九州の太宰府に追いやられてしまいます。

京都の家から泣く泣く大宰府に向かうことになった道真さんは、庭の梅の木にこう呼びかけます。「東風（こち）吹かば　にほひおこせよ梅の花　あるじなしとて　春な忘れそ」＝春風が吹くようになったら、香りを届けておくれ、梅の花。主人であるこの道真がいなくても、春を忘れてはいけないよ。

その後、なんと、梅の花は京都から道真さんのいる大宰府まで六百五十キロもあるのに、一晩でピューと飛んできて、着陸。今でもそこに咲いているそうです。

菅原道真さんにはこの、「飛梅伝説」のほか、色々なエピソードがあるので、調べてみると面白いです。たとえば、雷除けのおまじないとして「くわばら、くわばら」と唱えるとよいと言われていますが、これは道真さんの領地だった「桑原」には、雷が落ちなかったからだとか。道真さんは今でこそ学問の神様だけれど、その昔は怨念の塊になって、雷を落としまくっていた時もあったようです。

その道真さんの霊を鎮めるために建てられたのが、京都の北野天満宮。むか～し、昔、京都に住んでいた子どもたちは、七月の六日になると硯を洗い、文机もきれいにし、北野天満宮にお供えして、字や学問の上達を願ったようです。それが江戸の町に伝わり、七月の六日に硯を洗い、芋の葉の露からとった水で墨をすり、七夕の短冊を書いて、笹竹に飾るようになったようです。

また、七夕にはそうめんを食べる習慣が江戸時代にはあったとか。七日の給食のメニューを見ると、そうめんに近いものが出るようです。楽しみにしていてください。

昨日七月二日は一年のちょうど真ん中の日。一月一日から百八十三日目。十二月三十一日からも百八十三日目。正確に言うと、七月二日のお昼の十二時がちょうど一年のど真ん中。うるう年の場合は、夜の十二時がど真ん中。

今日、七月三日は、一年の半分を過ぎて、後半に突入しています。お正月にたてた目標は順調に進んでいますか？七夕にどんな願いをかけますか。一学期ももうあと少し。ラストスパートの時期です。

暑い日が続くので、健康に気をつけて、締めくくりに入ってください。

（立教小学校校長　田代　正行）